

## ジョン・デューイとソ連(1)

「ソヴィエト・ロシア印象記」(1928)

小西中和

Nakakazu Konishi

滋賀大学 / 名誉教授

ジョン・デューイは1928年にソヴィエト・ロシアを訪問し、その印象記を残している。本稿はその分析を通して、かつて20世紀の世界において大きな影響力をふるったロシア・マルクス主義とソ連国家についてのジョン・デューイの見方に検討を加えようとするものである。

こう言えば、ソ連・東欧の社会主義体制が崩壊してから早や四半世紀が過ぎており、マルクス主義の思想的影響も弱くなっている現在において何をいまさらという季節はずれ、あるいは反時代的という感を抱く向きも多かろうと思われる。だが、筆者は検討を試みる理由について次のように考えている。

デューイの生涯にわたる思想と行動の全体の特徴を理解するには、マルクス主義との関係を見逃すわけにはいかない。それは彼の民主主義思想の立場からは対決すべき思想であった。マルクス主義への批判的態度のあり方に彼の思想の特徴を探る手がかりが窺われるのではないかと思われるのである。

次に、ソ連・東欧社会主義の崩壊とともにマルクス主義のみならず、社会主義思想一般の退潮が顕著であり、他方で資本主義一辺倒の風潮が広がっているように見える。デューイは資本主義の害悪の克服のために、マルクス主義とは異なる社会主義のあり方を追求した。彼のソ連マルクス主義に対する批判はそのことの反映であった。今日の経済のグローバル化の中での市場原理主義の台頭、マネー経済の肥大化はさまざまな格差の拡大や環境問題などに示される資本主義体制の矛盾を露呈している。デューイはポスト社会主義が資

1) Bullert, Westbrook, Ryan. 森田。

2) デューイのロシア論をかかえる観点から論じた研究は管見のかぎりではほとんどない。彼の政治思想を検討する代表的著作の、Bullert, Westbrook, Ryanのいずれもが『印象記』の内容について検討していない。Dykhuizen, Engermanはデューイのロシア訪問についていくらか詳しく紹介している。

本主義の勝利ないし復活となっている現状を決して認めなかったように思われる。彼の思想的立場からすれば、資本の論理の暴走を抑制するために今こそソ連型マルクス主義とは異なる新しい社会主義像の構築の必要を力説したことであろう。ソヴィエト・ロシアへの批判において彼自身がそのことを試みようとしていたと思われるからである。

1930年代のアメリカは「赤い30年代」と呼ばれて、政治や思想や文化の面でマルクス主義の影響が強く現れた時代であった。デューイは30年代から40年代にかけてソヴィエト・ロシアに対する厳しい批判者として屹立していた<sup>1)</sup>。

だが、1920年代には、共産党やそのシンパたちのように闇雲に支持し、賛美するのではなく、他方で保守派のように革命を嫌悪し、一方的に非難するのでもなく、ロシアにおける社会主義建設を「壮大な実験」として注目するという態度を示していた。ソヴィエト・ロシアについてのデューイの見方はこのように左右両翼の立場とは異なり、また、時期によって違いを見せていた。本稿の課題は1920年代にデューイが見ようとした実験の内実とその意味を当時のロシアの現実的過程の展開に関連づけて探ることである<sup>2)</sup>。「ソヴィエト・ロシア印象記」を主たる素材としながら、彼の思索の跡を辿ってみよう。

## Ⅱ 「社会的絶対主義」(1921年)

1917年11月にロシアでボリシェヴィキによる革命が起きて社会主義政権が樹立されてから、アメリカ政府は国交断絶、干渉戦争、経済封鎖といった対ソ連政策をとり、国内的には共産主義者を取り締まる「赤狩り」キャンペーンを実施した<sup>3)</sup>。その

結果、国民世論の間でソ連・共産主義に対する反発・憎悪とともに、資本主義一辺倒の風潮が高まった。

デューイはそのような革命ロシアへの対応の仕方にアメリカの自由と民主主義の危機的傾向を見てとった。そこで彼は「社会的絶対主義」という問題観点からソ連社会主義の特質を捉え、併せてそれに対応するアメリカのあり方を検討した。それが「社会的絶対主義」(1921年)という論説であり、革命ロシアについて触れた最初のものであった<sup>4)</sup>。1928年の「ソヴィエト・ロシア印象記」の前提としてこれをまず検討することにしよう。

社会的絶対主義とは「人間の歴史にアプローチするとき一元的な絶対主義的観点をとる」ことであり、または、「歴史に対して単一の運動をそして人間に対して単一の法則や規則を押しつける社会的一元論」である。逆に言えば、それは人間の諸力の多様な活動、さまざまな集団の相互活動の意義を認めない考え方である<sup>5)</sup>。

社会的絶対主義にはいろいろな形があるが、「現在において戦闘的で積極的な形態」がロシアのボリシェヴィズムであるとして、デューイはその特徴を次のように説明した。「歴史の単一の目的は、プロレタリアートではなくて、無口で愚かなプロレタリアートを代表する知識人の独裁によってコミニズムを樹立し、それを通じて階級を廃絶することである。歴史の単一の法則は諸階級の敵対、内在的闘争、内戦である」。このことはもはやマルクスの著作や宣言で述べられている理論ではなくて、「行動における信条、強力で宗教的なほどの熱情に支えられる信条」となっている。「マルクスはヘーゲルの中に一元論、絶対主義、あらゆる運動が内在的な闘争によって生ずるという確信を読み取っ

3) 1920年1月にパーマー司法長官は共産主義者等の全国一斉取り締まりを強行した(Shannon, 181-183)。他方、1920年5月に、コミンテルンの指示により、アメリカ共産党が結成され、一部は地下活動に入った(Bell, 122-125)。

4) この時期の出版では、ソヴィエト・ロシアについて敵視あるいは無関心の態度が多かった(Dewey 1931, 263. ラカー、27-29頁)。その中で、ウェルズ、ラッセルはともに1920年にロシアを訪れ、ボリシェヴィズムを批判しながらも革命ロシアを好意的に評価している。

5) Dewey 1921, 312-313.

たが、それは今日のロシアのボリシェヴィズムの中に体现されている」。かくして、ボリシェヴィズムは前に述べた社会的絶対主義だというわけである<sup>6)</sup>。

だが、このようなボリシェヴィキの社会的絶対主義はアメリカにおける本来の民主主義と相反する。その本質は「多元主義、実験主義、その結果としての寛容」だからである。民主主義は「人間性の無限の多様性と人々を相互に結合する目的の複数性」を認める。「進歩が決して単一の方角においてではなく、多様な物事が作用しあうときに生ずる」と考える。そして、「運動は実験的發展のための力や原理に働く余地が与えられる多面的な相互作用によって生ずる」と確信する。だから、民主主義の観点からは、「善意の資本主義あるいはプロレタリアート独裁のいずれによっても、あらゆる上からの大衆の解放を疑うであろう」というのである<sup>7)</sup>。

では、かかる民主主義の立場から見て、ソ連に対するアメリカの対応はどう評価されるのか。もし資本主義が社会における単一の目的や法則であると信じる社会絶対主義に立てば、米英仏などの列強の対ソ連政策は正しいことになる。ソ連は外国における革命と内戦をけしかけ、各国の資本主義の打倒を主張しているからである。だから、資本主義を絶対化する人たちは「ソ連に対する干渉戦争を、それが失敗すれば、完全な国交断絶や経済封鎖を支持するだろう。国内では、抑圧、検閲、スパイ活動、それが失敗すれば非難や感情的テロ行為を支持するだろう」。これらはアメリカで現実にかき起していることであるが、そういう態度は「ボリシェヴィキと同じ手を使って対抗し、ボリシェヴィズムの哲学にひそむ絶対主義を例証している」と思われた。他方で、経済封鎖や国内の反共キャンペーンを嘆く人たちは、ボリシェヴィキの真の姿を

知的に洞察することなく闇雲にソ連に支持を与える危険があると見られたのである<sup>8)</sup>。

デューイは、かかる状況について、「アメリカがボリシェヴィズムに転換する兆候はまったくないが、民主主義の衰退とある種の社会的絶対主義の無意識的な採用が存在する」と理解した。なぜなら、もし民主主義の立場に立てば、ソ連を闇雲に敵視するのではなく、「ロシア人として知られる巨大な人間集団が彼ら自身の実験を行い、彼ら自身のやり方で教訓を学ぶ権利を考えるべきだからである」。彼らの実験が国の内外において最終的に失敗するだろうと確信してもよいが、それはアメリカ国民が「民主主義の思想や方法を知的に熟達する程度に応じたものである」。将来においてたとえマルクス主義的な社会的絶対主義の破産があるとしても、そこには「生活のより良い秩序づけという問題に対する積極的な価値の多くの貢献が展開されているだろうし、その社会的教訓を学び、採用することを切望すべきであろう」。「これ以外の方法はすべてプロレタリア的な絶対主義に反対しながら資本主義的な社会的絶対主義を促進することを意味している」<sup>9)</sup>。

ソ連の見方について左右両翼の立場——闇雲な賞賛と非難——を排して、民主主義の観点から社会的実験として注視するというデューイの立場は1920年代を通じて彼のソ連観の中心を占めることとなった。

### III 「ソヴィエト・ロシア印象記」 (1928年)

デューイは1928年7月に「アメリカロシア文化交流協会」が計画した教育視察団の一員としてレニ

6) Ibid., 314-315.

7) Ibid., 315-316

8) Ibid., 316.

9) Ibid., 316.

ングラードとモスクワを訪れた。ソヴィエト教育人民委員部に受け入れを承認されていたが、非公式なもので、旅費も自弁であった。彼は帰国後にソヴィエト・ロシアの印象記を『ニュー・リパブリック』に連載した<sup>10)</sup>。それを素材にしてこの時期の彼のソ連観を探ってみよう。

## 1. 民衆の解放と新しい精神の創造

デューイは最初の訪問地のレニングラードについて「ペンキのはがれた壁が目立つ雑然とした街にもかかわらず、動いており、活気があり、エネルギーがみちているという印象を持った。人々はある強力な抑圧的重荷が除去されたかのように、そして解放されたエネルギーの意識に新しく目覚めたかのように動き回っている」と記した。ロシアの民衆はボリシェヴィキ政権によって「悲惨な状態に閉じ込められ、抑圧されている」という外国でのイメージとは異なって、生活の荒廃と貧窮に苦しみながらも、「解放された勇氣、エネルギー、生活への自信」を持って行動していた。

これはモスクワでも同じであったが、現地でこのような印象はデューイにそれまでの革命の見方の変更を促した。「革命のより基本的事実は、単に政治的また経済的よりもむしろ心理的また精神的と呼ぶことによって暗示されること、つまり生活の必要と可能性に向かう人々の態度における革命である」、換言すれば、「心と精神の革命の達成、つまり、自分たちの最終的な運命を形成する決定的力として自らを意識するように人々を解放したことがより重要だ」というのである<sup>11)</sup>。

デューイが接触した人たち——教育者だけでなく労働者も——は「自発的な創意と協同的な精神の組織された活発な活動」を展開しているように

見えた<sup>12)</sup>。そこには、生活の経済的条件の向上にとどまらず、「芸術的な性質にみちた民衆の文化の創造」を目指す「建設的な計画と活動」が見られた。彼らは、「教養の発展と、だれもがそれに参加できる可能性の実現を目指していたのである」。これは、経済的局面に偏っていたデューイの社会主義像を大きく変えることになった。社会主義における文化革命の要素の不可欠性を考えるようになったのである<sup>13)</sup>。

人びとは「物質的な苦境をものともせずに、自由な文化を普遍的なものにするという人間的で道德的な理想に献身していた」。デューイはそのような態度に「宗教的な熱情」を感じ、「原始キリスト教を動かした精神と力はこのようなものではなかったか」と述べた。そして、「この宗教的熱情を考慮に入れなければ、だれも現在のロシアの動きを理解できないだろう」と考えた<sup>14)</sup>。

民衆の解放されたエネルギーに基づく新しい精神が社会主義の建設に向かうかどうかについて根本的に重要な問題があった。「コミニズムの立場からしても、問題は、資本主義的制度を集産主義的制度に変更することだけでなく、「ブルジョア」時代から引きついだ個人主義的精神——労働階級のみならず農民にも知識人にもなおみ込んでいる精神——を集団主義的精神へ転換する問題である」<sup>15)</sup>。制度を作るとともに、制度を動かす精神が問題だというわけであった。

革命によって解放された民衆のエネルギーはネップの下でさしあたり「個人主義的精神」に基づく私的利益の獲得行動に向かった。ネップについては後述するが、デューイは革命ロシアの実際の状況を見て疑問をいだいた。「見たところ外国においてと同じように金銭をまた金銭的利潤を求めて

10) Dykhuizen, 235-236.

11) Dewey 1928, 203-204.

12) デューイが接触した人の中には、政府の教育人民委員部の幹部を務めていたレーニン未亡人のクルプスカヤがいた (Ibid., 243)。

13) Ibid., 244-245.

14) Ibid., 245-246.

15) Ibid., 221.



お客に商品を売っている多くの商店がある。それらはどのように仕入れ、また経営しているのか。政府所有の数はどれくらいあるのか。協同組合の数はどのくらいで、国家との関係はどうなっているのか。私企業の数はいかに確保されているのか。暴利をむさぼることへの誘惑を規制する手段はどうなっているのか」<sup>16)</sup>。経済の現状はどう見てもきわめて明らかに貨幣経済であり、「私的資本主義ではないが、政府資本主義の体制」だと思われた<sup>17)</sup>。

だが、経済の現状の根底で広がっている個人主義的精神を放置することは私的資本主義の復活を招きかねないから、社会主義建設の方向に相反する。そこで民衆のエネルギーと行動を「集団主義的精神」の方向へ転換する必要があった<sup>18)</sup>。

これは、「大衆の欲求や信条における変革」であり、「人間の行動を動かす動機を変革するという壮大な精神的実験」であった。したがって、デューイは、「ロシアで進行している事柄の究極的な意義は民衆の精神的また道徳的な性向の変革に見出されるべきである」と考えた<sup>19)</sup>。その変革の問題はロシアのみならず、資本主義体制の変革を志向する世界中の人たちにとって避けられない関心事であった。だから、革命ロシアの動きを「世界で進行している最も興味ある実験として考えることが有益である」と指摘した<sup>20)</sup>。

しかし、デューイは「率直に言えば、自己本位の理由からではあるが、アメリカよりもむしろロシアにおいてその実験が試みられることを見たい」と述べた<sup>21)</sup>。アメリカにおいては、「ソヴィエト・ロシ

アで大きな破壊と強制を伴った道」を回避して、社会変革を「建設的にかつ自発的に始めること」を考えていたからである<sup>22)</sup>。

## 2. 実験的精神と民衆の社会主義像

デューイの見るところでは、「秘密警察、ネップマンやクラークに対する権利無視、逮捕や追放、反対党派——党内異端を含めて——の流刑ということがあるにもかかわらず、大衆の生活は通常どおりで安全に秩序をもって行われていた」<sup>23)</sup>。いろいろな見聞を通じてロシアの民衆の解放されたエネルギーと新しい精神の息吹が感じられた。そして、「教条主義的理論に基づいて国家によって硬直的に管理されていると想像された社会」において「自発的な創意と協同的な精神の組織された活発な活動」があることを驚きをもって発見した<sup>24)</sup>。

「ソヴィエト政権の最初の10年は、大胆な知的芸術的実験の時代であり、思想とスタイルが創造力豊かに無数に現れた時代であり、そしてまた社会主義的インスピレーションが最高潮に達した時代であった」という指摘がなされている<sup>25)</sup>。デューイはそのような時代の雰囲気を感じ取ったのであろう。

デューイは教育現場での見聞を通じて、「マルクス主義の教義体系がいかに硬直的でドグマティックであろうとも、現実の実践が柔軟で活力に満ちた創造的な実験的な要素に影響されている」ことを見出した<sup>26)</sup>。

だが、彼はまた、「ソヴィエトの公式の神学的理論体系、つまりマルクス主義の教義」と民衆の新

16) Ibid., 208.

17) Ibid., 207.

18) Ibid., 221.

19) Ibid., 243, 223.

20) Ibid., 224. デューイはアメリカによるソヴィエト政権の承認を求めた。承認が両国の友好的関係を直ちにもたらすことはないにしても、接触の機会を増やすことによって情報が入り、相互の理解が進むことを望んだからである(Ibid., 249)。当時

アメリカは資本主義列強の中で唯一の未承認国であり、承認が実現したのは1933年11月であった。

21) Ibid., 244.

22) 小西2003、第6章、7章は、そのような彼の立場をリベラル社会主義と呼び、その思想と行動の特徴を検討している。

23) Dewey1928, 211. ラッセル、56頁。「20年代には暴力と盲目的衝動に対する抑制はなお働いていた」(浜内1978、305頁)。

しい精神にふくまれる「人間の可能性への生き生きとした宗教的信念」の間に「不釣り合い」を感じた。だから、「ロシアの将来についてのどんな予測も一方での硬直的な教義と他方での実験的精神の矛盾と対立を考慮しなければならない」と考えた。マルクス主義の硬直的教義と実験的精神の対比によってロシアの実験とその将来を考えようとしたのである。そして、「どちらが勝つかを言うことはできない」としながらも、「ロシアの民衆は現実への一連の適応を通じて最終的に新しい人間の連合の形態を構築するだろう」と実験的精神に基づく社会主義の建設に期待した。「新しい精神態度は、それが本当に新しくまた革命的である程度に応じて、それ自体の欲求や目的に従ってそれ自体の社会を創出するだろう」。つまり、解放された民衆の新しい精神は硬直的教義に適合しないと考えたのである<sup>27)</sup>。

だから、その社会主義像は、「西欧の私的な資本と個人的利潤を特徴とする」資本主義体制と異なることはもちろんのこと、正統派マルクス主義の硬直的教義が指示する社会主義像、つまり国有化と集権的な国家による指令型計画経済の体制とも異なるものであった。デューイは民衆の社会主義像を「高度の自発的な協同組合化とそして資本の蓄積と使用の高度な社会的統制という特徴を持つ蓋然性が高い」と予想した<sup>28)</sup>。

しかし、当時のソヴィエト政権の支配者たちはネップ下の現状を過渡的段階であるとし、正統派マルクス主義の教義が指示する国有化と集権化された国家による指令型計画経済の体制へやが

て移行すると説明していた。それに対してデューイは手段と目的の観点から疑問を提示した。「なぜ手段がまた目的でもあってはいけないのか、そしていわゆる過渡的段階が目標の特徴を明らかにしてはいけないのか」というのである<sup>29)</sup>。

支配者の立場では、マルクス主義の教義の硬直的適用によって社会主義の目標は不動のものとして前もって決定されており、手段としての協同組合化とのつながりが切断されていた。だから協同組合を基礎として別の社会主義像を描こうとする発想が出てこない。さらに、決められている目標を実現するために、正統派マルクス主義の階級闘争理論がまた硬直的に適用されることになった。こうして、彼らの社会主義像は自発的な協同組合化の意義をほとんど軽視し、暴力を伴う強制的な手段による建設のあり方を含むことになった。

しかし、手段と目的の連続性というデューイの考え方からすれば、現実の行動において選択された手段のあり方が結果としての目的のあり方に影響を及ぼすことは当然である。だから、協同組合化を手段として採用すれば、その結果が硬直的教義に基づいて支配者たちの想定する社会主義へと向かうことは疑問に思われた。むしろ協同組合化を基礎にした社会主義のあり方の方が「蓋然性」が高いと考えられたのである<sup>30)</sup>。

支配者たちが考える社会主義像と異なる結果が生じるとしても、それをコミュニズムの信条体系の否定とみなす必要はないとデューイは考えた。「信条体系は、キリスト教や民主主義の歴史がともに示しているように、事実の中で持続しかつ変化

**24)** Ibid., 214. 「ネップが本格化する1923年から穀物危機までの約5年間は、一定の政治的・社会的安定が達成され、民主化と多元化が国民生活の各分野で前進した時期であった」(浜内2004、23頁)。

**25)** 浜内1978、313頁。

**26)** Dewey 1928, 248. ロシアの教育関係者との接触の一端について、Engermanが触れている(39-42)。

**27)** Dewey 1928, 246-247. 森田、99頁。

**28)** Ibid., 223, 247. ラッセル、17-19頁。

**29)** Ibid., 248. 「10月革命後の実践では、目的と手段の適合性の確立は、……具体的には国民の大多数を占める農民との合意の確保という方向に模索された」(浜内1988、163頁)。そのためにレーニンが手段としての農業の協同組合化の意義を強調した。

**30)** Bullert, 128.

に適應する多くの方法をもっている。だから、連続性の著しい断絶がなければ、事実においてどのようなものであれ、その結果はおそらく Kommunismus と呼ばれるであろうし、またその最初の創始者たちの信条の実現として理解されるであろう」<sup>31)</sup>。つまり、協同組合を基礎として作りだされる別の社会主義のあり方も本来の社会主義の理念を具体化するものとして考えられるというわけであった。

さて、このようなデューイの立場からして、当時のロシアの現実において注目されたのが、協同組合化と学校教育という二つの動きであった。それらは個人主義的精神から集団主義的精神への転換、民衆の欲求や生活の必要に応じるかたちでの社会主義建設という課題に適合的な手段のあり方と考えられた。

まず、「最大の重要性を持つと思われたのは自発的な協同組合団体の発展であった」<sup>32)</sup>。「大多数の民衆は、マルクス主義の教義に誘引されることよりも、Kommunismus が民衆の自由な生活のために何をしてくれるのか、生活の安全や安心の感覚を持てるために何をしてくれるのか、娯楽、余暇、楽しみ、そしてあらゆる種類の新しい教養を入手できるように何をしてくれるのかによって Kommunismus の意味を学ぶはずである」。民衆はイデオロギーによって、その押しつけによって Kommunismus を支持するわけではない。したがって、「もっとも効果的な教育としての、もっとも効果的なプロパガンダの方法は民衆の生活の水準を向上させ、それをより充実し、豊かにしながら、利得を「集団主義的精神」と分かちがたく結びつけるような活動だということになる」<sup>33)</sup>。

ロシアでは農民が人口の大多数を占めており、彼らの支持を確保することは社会主義建設にとつ

て不可欠であった。だから政権は不愉快ながらも彼らの利益や欲求を顧慮し、一定の譲歩を行っていた。だが、農民は本来的に個人主義的であり、それを放置すれば社会主義建設の障害となる。彼らの個人主義的行動様式を集団主義的なそれへと誘導し、社会主義に向ける必要がある。協同組合化はその手段として位置づけられた。そのような誘導の場として協同組合は考えられたのである。

次に、デューイは、協同組合ほど「直接的で実践的意義を持つわけではない」としながらも、「教育制度の実験的側面」に注目した。「新しい集団主義的精神を作り出す」ことは「基本的に教育の仕事」であり、教育者たちは「教育によって民衆の中に新しい精神を創造するという重い責任を果たしていた」。もちろん彼は学校において Kommunismus のイデオロギーの「多くの教え込みや宣伝がある」ことを認めた。しかし、「現在の傾向が進展するならば、独自の判断を始める才能や力が目覚めるとともに、協同的な精神が発展して、最終的には教え込みが後退するだろうと予測してもよいように思われた」。なぜなら、「知的に自由な教育がドグマとしての教義の隷従的な受容を減らさないことはあり得ないと思われた」からである。かくして、教育によって新しい実験的なそして協同的な精神が陶冶される。したがって、デューイは「学校がロシアの Kommunismus の発展における「弁証法的」要素だと考えたのである」<sup>34)</sup>。

## IV | デューイとレーニン

### 1. デューイのレーニン紹介

以上に見てきたロシアの印象と将来の推測について、デューイは、主として教育関係者たちとの接

31) Dewey 1928, 247

32) Ibid., 248.

33) Ibid., 222. デューイはロシアの実験から、「アメリカの農民の経済的だけでなく文化的な将来が、自発的な協同組合によって、ロシアの独裁制が農民のためになしつつあるよう

なことを自らなしうるかどうかにかかっている」という問題関心をいだいたように思われる (Dewey 1931, 265)。

34) Dewey 1928, 221, 248-249.

35) ウェルズは、1920年にレーニンと会見し、「共産主義の計画の広大さと複雑さを率直に認識してその実現にひたむき

触に基づくものだとしながら、それが革命の指導者であるレーニンによって裏づけられると述べた。レーニンは1924年に死去したので、デューイが直接に会うことはできなかったが、未亡人のクルプスカヤとは会見した<sup>35)</sup>。おそらくレーニンの考えを聴いたことであろうし、その著作についても教えられたことと思われる。

デューイは印象記の中でレーニンからの引用を含めてその考えを紹介している。デューイの印象記にはレーニンからの影響ではないかと思われるところもあるので、ここでは、両者の思想的な関連を探ってみよう。そして、デューイが指摘した「実験的精神と硬直的教義の矛盾と対立」の行方について検討してみたい。

デューイはレーニンの考えを次のように紹介している。

ボリシェヴィキ革命の遂行によってロシアの状況は大きく転換した。「革命が起きる以前に、教育と自発的な協同組合が何か重要なことを達成できると考えることは空想的であった」。なぜなら、「労働者は革命によってまずもって権力を奪取しなければならない」と考えられていたからである。

しかし、「彼らが政権を手中にしたとき、『社会主義にたいするわれわれの見方に根本的な変化が生じた。それはこうである、以前は政治闘争と権力の獲得に重心がおかれなければならなかった、今ではその重心が平和的で文化的な活動の方向におかれているということである。それは、もし我々の国際関係と、そして国際システムにおける我々の地位を守る必要とがなければ、いまや知的な方向に向かうであろう、とわたしは進んで言わなければならない。もし我々がその局面を無視し、国内の経済関係に限定すれば、われわれの活動の重

心はすでに知的な活動にある』。さらに、レーニンは続けて、社会主義の目標が今や経済的に言えば、協同組合の推進という課題と同じであると語り、『完全な協同組合化は知的な革命なしには不可能である』という重要な言葉を付け加えた<sup>36)</sup>。

デューイが自己の問題関心をレーニンの中に読み取ったことが、この紹介と引用にうかがわれるが、そのことをもう少し検討するために、デューイが紹介したところを含めて関連する部分について、レーニン自身の原文をここで参照してみよう。デューイが紹介したのは、レーニンが最晩年の1923年に書いた「協同組合について」という論説であった。長くなるが、レーニンの主張を引用する。

「いまではわが国では協同組合がまったく特別に重要な意義をもっているが、このことは、おそらくすべての人々が理解しているわけではないであろう。……そしていまや、古い協同組合活動家たちの念願のなかで空想的であったもの、ロマンティックでさえあったもの、卑俗でさえあった多くのものが、この上なく飾り気のない現実となっているのである。

実際、わが国で国家権力が労働者の手に握られたからには、またすべての生産手段がこの国家権力に属するようになったからには、実際、わが国で任務となったことは、住民を協同組合に組織することだけである。住民が最大限に協同組合に組織されると、以前に階級闘争や政治権力獲得のための闘争などが必要だと正当にも信じていた人々からは、当然にもあざけられ、わらわれ、軽蔑されていたその社会主義が、ひとりでにその目的を達する。……しかし、ネップを通じて全住民をひとりのこらず協同組合に参加させることは歴史的な一時代が必要である<sup>37)</sup>。

になっている驚くべき小男、レーニンはきわめて新鮮であった」と印象を語っている(103頁)。ラッセルも、1920年にレーニンと会見しており、「彼の強さは彼の正直さ、勇氣、不動の信念から来ていると、私は想像している、彼の信念は、いわばマルクス主義の信念にたいする宗教的な信仰である」と述べている(36頁)。

36) Dewey 1928, 242. 二重括弧はデューイによるレーニンからの引用。

37) レーニン1923a、487、490頁。



「いまではわれわれは、協同組合のたんなる成長も、われわれにとっては社会主義の成長と同じことである、と言ってさしつかえない。それとともに、社会主義にたいするわれわれの見地全体が根本的に変化したことをみとめないわけにはいかない。この根本的変化は以前は我々が重心を政治闘争、革命、権力の獲得などにおいていたし、おかないわけにはいかなかったが、いまではこの重心が平和な組織的・「文化的」活動に移されるまでにかわってきている、ということである。もし国際関係がなければ、もし国際的規模でわれわれの地位をまもるためにたたかう義務がなければ、私はわれわれの重心は文化活動にうつるべきであると、喜んで言おう。しかし、この問題を別として、国内の経済関係にかぎれば、いまではわが国の活動の重心は、実際に文化活動にうつっているのである。……」

農民のあいだでの文化活動は、経済目標として、ほかならぬ協同組合化を目指している。完全に協同組合化すれば、われわれは、すでに社会主義の基礎にしっかり立つことになる。だが、この完全な協同組合化という条件は、完全な文化革命なしにはこの完全な協同組合化が不可能なほどの、農民の（まさに膨大な大衆としての農民）の文化水準を、そのなかにふくんでいる」<sup>38)</sup>。

デューイが見たように、革命によって解放されたロシアの民衆のエネルギーは、ネップの下で利潤を求める個人主義の精神となって現れた。放置すれば私的資本主義へと発展しかねないこの精神をいかにして社会主義を建設し、それを支える集団的な精神へと転換するのか。これこそは最晩年のレーニンが苦闘した問題であり、デューイがレー

ニンにもっとも関心を示したことだったと思われる<sup>39)</sup>。

レーニンは共産主義を押しつけるやり方を否定した。「わが国の農村に共産主義の物質的基礎がないうちは、それ（—共産主義思想を即刻持ち込むこと—）はいわば有害であろう、それは共産主義にとっていわば破滅であろう」<sup>40)</sup>。そこで、協同組合の意義を強調したのである。協同組合は「私的利益、私的商業の利益と国家によるその点検及び統制とを結合させる」方法、「私的利益を公共の利益に従属させる」方法であり、「農民にとってできるだけ簡単で、容易で、わかりやすい方法で新しい秩序に移行する」通路である。だから、「ネップの支配のもとでロシアの住民を十分に広く、またふかく協同組合に組織することが、われわれにとって必要なすべてのことなのである」。それは社会主義の建設に「必要で十分なすべてのものである」<sup>41)</sup>。

こうしてレーニンは、労働者政権が樹立された後では、革命の仕事の重心が文化的活動の局面へ、つまり、個人主義から集団主義への民衆の精神の変革へと移っていることを指摘し、その方法として協同組合化を位置づけた。だが、文化革命を伴う協同組合化の完全な実現には「歴史的な一時代が必要」であった。だから、社会主義の建設は漸進的なことにならざるをえなかったのである。

さらに、レーニンはもう一つの重要な方法として学校教育の意義を指摘し、教員の質の向上、経済的条件の改善、そのための予算の確保の必要を強調した。デューイは、「共産主義制度がうまく作用する条件として共産主義のイデオロギーを作りだすことにおいて学校が中心的位置」を占めるとする考えをレーニンからの引用によって紹介している<sup>42)</sup>。

38) 同上、494頁。

39) レーニンと社会主義建設の問題については、雀部、第6章が、きわめてスリリングで啓発的である。そこでは、スターリンの「上からの革命」の路線とは異なる方向がレーニンの中に探られている。

40) レーニン1923b、485頁。括弧内は引用者。

41) レーニン1923a、488頁。

42) Dewey 1928, 232. レーニンによる文盲根絶の強調について、Dewey 1929, 493-494で紹介している。また、レーニンによる教育への言及については、1923b、482-484頁に見ら

## 2. 実験的精神と硬直的教義の行方

上に見たように、レーニン協同組合についての自分の主張について「社会主義にたいするわれわれの見地全体が根本的に変化した」と述べた。かつてロバート・オーエン流の協同組合社会主義を空想的と罵倒した正統派マルクス主義の教義から見れば、レーニンの考えは大きな修正のように見える。そこには硬直的教義に縛られない精神があるように見える。デューイが革命ロシアに見た実験的精神と硬直的教義の「矛盾と対立」はおそらくレーニン自身の思考の中にもあったであろうが、しかし、レーニンはロシアの実際の条件に現実的に対応する中で、硬直的教義から離れる柔軟な思考を示してきたように思われる。このことをもう少し確かめるために、彼が主導したネップ導入の際の主張を振り返ってみよう。

1917年11月にボリシェヴィキ政権が樹立されたが、反革命勢力との内戦および外国からの干渉戦争に対処するために、1918年11月に、政権は戦時共産主義政策を採用した。これによりすべての企業を国営化して中央政府の統制の下に置き、農民から必要最少量以外の余剰穀物を徴発することになった<sup>43)</sup>。1920年代末までに内戦と干渉戦争は終わったが、戦時共産主義体制の下で国民生活は激しい窮乏と荒廃とに苦しめられた。1921年3月のクロンシュタットの反乱に代表される国民の不満と反抗に直面して、ボリシェヴィキ政権はネップ(新経済政策)の採用へと転換した<sup>44)</sup>。

レーニンは「食糧税について」(1921年)という論説でネップの意義について次のように説明した。

ネップの特徴は戦時共産主義を廃して「割当徴発から食糧税に代えること」にあった。それは「すくなくとも地方的な経済取引の範囲で納税後の商

業の自由を伴うもの」であった。だが、「これから生じるのは(地方的なものにすぎないとはいえ)自由な商業にもとづく、小ブルジョアと資本主義の復活である」。つまり、余剰農産物の市場での売買を認めることによって、小ブルジョア的な資本主義の発展の道を開いたのである。

だが、これでは「共産主義一般からブルジョア制度一般への移行」、ないしは「社会主義への裏切り」ではないのかという疑問が当然出てくる。レーニンはそのような疑問に対して、そうではないことを力説した。本来的な社会主義の経済政策としては、市場を経由することなく穀物や原料の農産物と農民の必要とする工業製品を交換することであるが、工業化の遅れた経済の現状では、農産物と引き換えに農民が必要とするすべての工業製品を与えることはできない、「それはとうていできないし、またそんなにはやくはできないだろう」。

なぜなら、「窮乏と荒廃とが非常にひどいために、大規模の工場的・国家的・社会主義的な生産を一挙に復興することはできない」からである。だが、他方で、「私的な、非国家的な交換のあらゆる発展を、つまり商業の発展、すなわち資本主義の発展を禁止」する政策は経済的に不可能である。「共産主義者のうちのあるものは、ほかならぬそのような政策に陥って、「思考と言葉と行為」の上であやまちをおかしたが、そのあやまちをかくしだてするにはおよばない。われわれは、このようなあやまちを是正するように努力しよう。このような誤りは、かならず是正しなければならない。さもなければ、まったくみじめなことになるであろう」。

かくして、レーニンは戦時共産主義の政策を廃止し、食糧税を導入するネップへの転換を提起したのであるが、その主張にも、硬直的な教義に縛

れる。

**43)** トロツキーは、戦時共産主義を「全資源が少なくとも原則としては国有化され、国家の指令によって配分される体制」、「国家による産業管理と生産物配分のシステム」と述べている(321頁)。だから市場を通じての商品交換は否定された。

**44)** レーニン1921, 370-371頁。

られることなく、実際の条件の変化に現実的に対応する柔軟な思考がうかがわれるであろう<sup>45)</sup>。

レーニンは、「理論は灰色であり現実には緑だ」というゲーテの言葉を愛したと言われており、また、現実の行動において誤りを恐れず、それを隠そうとしなかった<sup>46)</sup>。したがって、彼は教義に縛られた硬直的な思考と行動から距離をもっており、デューイの言う実験的精神に通じる思考態度の持ち主であったように思われる<sup>47)</sup>。

では、「社会主義にたいするわれわれの見地全体が根本的に変化したことをみとめないわけにはいかない」というレーニンの主張をどのように理解したらよいのか。

これについては、「すべての著作の中でも最も明晰にかつ極度の激しい熱情的な政治的エネルギーをもって規定されたテーゼ」、「衝撃的な告白」、「教義上の転向」や「社会主義一般の再定義」、あるいは「<科学的社会主義>像の大きな転回」などというコメントがなされている<sup>48)</sup>。デューイもまた従来の社会主義像の重要な修正だと受け止め、しかも実験的精神の現れとして肯定的に評価したように思われる。

だから、「実験的精神と硬直的な教義の矛盾と対立」というデューイの視点からすれば、レーニンにおける「社会主義に対する見地全体の根本的な変化」は実験的精神の「勝利」として理解できるであろう。だが、残念ながら、レーニンはその変化を踏まえた社会主義像が最終的にどのようなものになるのかを具体的に示すことなく、1924年1月に死去した<sup>49)</sup>。レーニン後の支配者たちはこの変化につ

いて「きわめて部分的にしか彼に従わなかった」<sup>50)</sup>。彼らの間で硬直的な教義の支配がだんだん強くなっていった。

デューイがロシアを訪問したころ、共産党内で社会主義建設の方法をめぐるスターリン派とブハーリン派の激烈な論争がおこなわれていた<sup>51)</sup>。スターリン派は工業化のテンポを速めるために、農業部門からの資金獲得を目指してネップの終了を主張した。そして農業の集団化における強制的な方法とクラーク（富農）の絶滅を階級闘争の激化による社会主義建設という正統派マルクス主義の教義によって強引に正当化した。他方で、ブハーリン派はネップの終了が労働者階級と農民の合意と結合というレーニンが強調したロシア革命の理念を崩壊させるものであり、社会主義建設を危うくするとして反対した。ブハーリンは「レーニンの政治的遺言」という論説を書き、レーニンの構想に基づくネップの枠組の継続を訴えた。デューイがロシアの実験の中に感じた「矛盾と対立」は両派の論争に含まれていたように思われる<sup>52)</sup>。

論争の結末はスターリン派の勝利で終わり、ロシアはネップの終了、そして五カ年計画の実施、農業の集団化へと移行することになった。それは説得と合意ではなくて暴力を伴う強制的な「上からの革命」の道であった。最晩年のレーニンの主張に見られた協同組合化を通じての社会主義建設の道の可能性は現実的に潰えたのである。

それは、「硬直的な教義と実験的精神の矛盾と対立」というデューイの観点からすれば、前者の最終的な「勝利」と後者の「敗北」を意味したと言える。

45) 戦時共産主義からネップへの移行について、溪内2004、第四章、奥田、第一章。

46) 丸山、62頁、ブハーリン、111頁。「まちがいを恐れない」というレーニンの態度には、デューイの実験主義に含まれる「可謬主義(fallibilism)」の特徴が見られる。

47) しかし、レーニンはマルクス主義者であり、世界観や科学観においてデューイと異なる。現実的認識において実験的精神の特徴が見られるとしても、それは究極的にマルクス主義の絶対主義的一元論の性格と矛盾し、対立せざるをえな

かった。そこにレーニン思想が孕む根本的な問題があった。例えば、そのことは既存の宗教に対する彼の否定的な態度に現れていた。(Dewey 1930, 358)。スターリンはマルクス主義の教義を極端に硬直化させ、その絶対主義の性格を前面に押し出したのである。マルクス主義におけるかかる思考の特質について、本稿Ⅱ、また、小西、第7章で触れている。

48) ブハーリン、110頁、奥田、83頁、レヴィン、126、127頁、雀部、407頁。

49) 奥田、83頁。

彼がロシアの実験に期待を込めて予想した協同組合化を通じての下からの社会主義建設の道は断たれた。かくして、ロシアは1930年代に入りスターリンの独裁的政治体制が成立し、硬直的教義が跋扈することになった。

スターリンは政策や方針、教義の解釈についての異論を一切許さなかった。自己の立場を「唯一正しい」路線として固守する無謬主義に陥った<sup>53)</sup>。そして以前に存在した政策論争は一切なくなり、反対派は次々に追放、流刑に処され、粛清・銃殺された。ブハーリンも1938年3月に粛清・銃殺された<sup>54)</sup>。

## V 結びにかえて

以上に見てきたごとく、デューイの「ロシア印象記」では、革命について手放しに称賛するというのではなく、また闇雲に否定的に見るのでもなくて、教訓を学ぶべき壮大な社会的実験として注視するという態度が示されていた。しかし、反ソ・反共の傾向が強い当時のアメリカ国内では、このような態度は革命ロシアに好意的であると受けとめられた。

AFL (アメリカ労働総同盟) の副会長で保守的なMatthew Woll は、デューイが「共産主義者」であり、「アメリカの教育制度に共産主義の種を植えつける目的で共産主義の宣伝を行っている」と非難した。彼を「ボリシェヴィキ」、「赤」、「共産黨員」と呼ぶ保守系の新聞も現れた。そのようなイ

メージはアメリカの保守派の中で彼の死後まで根強く続いた<sup>55)</sup>。

しかし、1930年代以降、デューイはソ連に対して厳しい批判的スタンスをとるようになった。それによって今度は逆にソ連政府やアメリカ共産党とそのシンパから反共主義者として痛烈な批判を受けることになった。ソ連に対する見方の変化とその意味はどのようなものであったのだろうか。稿を改めて検討することにした。

### 引用・参考文献

- ◎ Dewey, John, 1921 *Social Absolutism*, *The Middle Works*, Vol. 12, Southern Illinois University Press
- ◎ —, 1928 *Impressions of Soviet Russia*, *The Later Works*, Vol. 3.
- ◎ —, 1929 *Mr. Woll as a Communist-Catcher*, *The Later Works*, Vol. 5.
- ◎ —, 1929 *The Russian School System*, *The Later Works* Vol. 17.
- ◎ —, 1930 *Religion in the Soviet Union*, *Ibid.*
- ◎ —, 1931 “*Surpassing America*”, *The Later Works*, Vol. 6.
- ◎ —, 1973 *Lectures in China*, *An East-West Center Book*, The University Press of Hawaii
- ◎ Beineke, J.A. 1987 *The Investigation of John Dewey by the FBI*, *Educational Theory*, Vol. 37, No. 1.
- ◎ Bell, Daniel 1952 *Marxian Socialism in the United States*, Princeton University Press
- ◎ Bullert, G., 1983 *The Politics of John Dewey*, Prometheus
- ◎ Cork, Jim 1950 *John Dewey and Karl Marx*, Sidney Hook (Ed.) *John Dewey Philosopher of Science and Freedom*, Greenwood Press

50) レヴィン、128頁。レーニンは指導者としてのスターリンの思想と行動に危惧をいだき、彼を書記長職からはずすように訴える「遺書」を書いたが、実現されなかった。フルシチョフ、65頁。

51) 溪内2004、347-372頁が論争について詳しい検討をしており、たいへん啓発的である。

52) スターリン、29-33頁。ブハーリン、136-140頁。

53) 溪内2004、349頁。

54) 硬直的教義の支配は、目的がいかなる手段をも正当化するという倒錯的な論理を生み出し、スターリンの極悪非道な独裁政治を正当化することになった。

55) Dewey 1929, 392. 「デューイの遺灰がモスクワへ送られたという噂があった」と伝えられている (Dykhuisen, 239)。また、彼は共産党との関係について連邦捜査局による調査の対象にされた (Beineke, 43-44. Letter of Federal Bureau of Intelligence)。



- ◎ Dykhuizen, George 1973 *The Life and Mind of John Dewey*, Southern Illinois University Press
- ◎ Engerman, David C. 2006 John Dewey and the Soviet Union: Pragmatism Meets Revolution, *Modern Intellectual History* 3
- ◎ Letter of Federal Bureau of Investigation To whom it may concern 1942.10.20・1943.4.29, *The Dewey Correspondence*, Vol.3(Electronic Edition)
- ◎ Ryan, Alan 1995 *John Dewey and the High Tide of American Liberalism*, W・W・Norton & Company
- ◎ Shannon, David A. 1969 *Twentieth Century America Second Edition*, Rand McNally & Company
- ◎ Wald, Alan M. 1987 *The New York Intellectuals*, The University of North Carolina Press
- ◎ Westbrook, R. B. 1991 *John Dewey And American Democracy*, Cornell University Press
- ◎ H・G・ウェルズ(生松敬三・浜野輝 共訳) 1920『影の中のロシア』(みすず書房、1978)
- ◎ E・H・カー(南塚信吾訳) 1969『ロシア革命の考察』(みすず書房、1969)
- ◎ 奥田央 1979『ソヴェト経済政策史』(東京大学出版会、)
- ◎ 小西中和 2003『ジョン・デューイの政治思想』(北樹出版)
- ◎ 雀部幸隆 1980『レーニンのロシア革命像』(未来社)
- ◎ スターリン 1929「ソ同盟共産党(ボ)内の右翼的偏向について」『スターリン全集12』(大月書店、1953)
- ◎ 浜内謙 1978『現代社会主義の省察』(岩波書店)
- ◎ —, 1988『現代社会主義を考える』(岩波書店)
- ◎ —, 1992『歴史の中のソ連社会主義』(岩波書店)
- ◎ —, 2004『上からの革命』(岩波書店)
- ◎ トロツキー(志田昇訳) 1930『わが生涯 下』(岩波書店、2001)
- ◎ プハーリン(和田敏雄・辻義昌訳) 1929「レーニンの政治的遺言」『プハーリン著作選2』(現代思潮社、1970)
- ◎ フルシチョフ(西原五十七訳) 1958『十月革命の四十周年』(日月社)
- ◎ 丸山真男 1961『日本の思想』(岩波書店)
- ◎ 森田尚人 2003「『赤い30年代』のジョン・デューイ——リバリズムとスターリニズムのあいだ——」『教育学論集』(中央大学教育学研究会)
- ◎ W・ラカー(中沢精次郎訳) 1967『革命の運命 ロシア革命史論』(未来社、1973)
- ◎ B・ラッセル(河合秀和訳) 1920『ロシア共産主義』(みすず書房、1990)
- ◎ レーニン 1921「食糧税について」『レーニン全集32』(大月書店、1959)
- ◎ —, 1923a「協同組合について」『レーニン全集33』(大月書店、1959)
- ◎ —, 1923b「日記の数ページ」(同上書)
- ◎ M・レヴィン(河合秀和訳) 1967『レーニン最後の闘争』(岩波書店、1969)

## John Dewey and the Soviet Union (1)

The Impressions of Soviet Russia(1928)

Nakakazu Konishi

John Dewey traveled to the Soviet Union Russia, Leningrad and Moscow areas in 1928, with twenty-five other educators, for the purpose of examining the Soviet educational system. Upon his return to the U.S. Dewey wrote a series of articles for summarizing his impression of what he had found in Soviet schools and Russian life.

Dewey had the impression of movement, vitality, energy in Russian life. The people went about as if they were newly awakened to the consciousness of released energies. He believed that the final significance of change in Russia is not to be grasped in political and economic terms, but found in change in the mental and moral disposition of a people. Because the problem was not only that of replacing capitalistic by collectivistic economic institutions but also substituting a collective mentality for the individualistic psychology inherited from the “bourjui” epoch.

Any predictions about Russian future had to take into account the contradiction and conflict between rigid dogma on one side and an experimental spirit on the other. Dewey anticipated the probability that the form of socialism on the basis of experimental spirit will be marked by a high degree of voluntary cooperation and a high degree of social control of the accumulation and use of capital.

Dewey thought that Lenin gave authority to his prediction. According to Dewey, Lenin said that the cause of socialism is, economically speaking, identical with that of the promotion of the Cooperation. The idea of Lenin seemed to be the product of experimental spirit. But Lenin’s program was not realized in the actual process of Russian socialism. Soviet Russia substituted the Program for the Five Years for the NEP. The rigid dogma defeated the experimental spirit. Dewey’s anticipations failed.